

散り行く花の勇者

オーダー・カオス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神々によって滅びが定められし都市トロイア。

その王族に一人の英雄が生まれた。

しかし、その英雄は生まれながらにして戦いを宿命づけられた。

これは一人の英雄の物語。

運命に抗えし花の如く英雄の物語。

目次

プロロゴス

「ニネミア」

1

「予言の使者」

4

第一エペイソディオン

「フルトウーナ」

9

「カツサンドラ」

16

「運命の岐路」

19

プロロゴス

「ニネミア」

「陛下！御子が無事生まれました！」

「おおっ！それは真か！して、王子か？姫か？」

「はい！可愛らしい姫君にごぎいます！」

「そうか！それはよいな！民に愛される子に育てばいいな！」

トロスを名祖とするアポロンとポセイドンが築いた堅牢なる城壁に囲まれし都市トロイア。

傲慢と強欲によって大英雄に滅ぼされしラオメドンの子にして現トロイアの王慎み深しプリアモスとその王妃ヘカベーとの間に新たに姫君が生まれた。

プリアモスは子が多くいながらも子煩悩な王であり、王妃ヘカベーや側妃との間に生まれた一人を除いた101人の子ども達を全て愛する善き父である。

その例外の一人についても、王としては捨てざるを得なかったのだが。

それでも父として全ての我が子を愛する善き父である。

後世、彼らの末裔が強大な帝国を築き上げたのは彼の情愛が帝国の神祖に受け継がれたからかもしれない。

その情愛に溢れた王が新たに授かった娘が可愛くないはずがない。

プリアモスが我が子を愛するのは捨てざるを得なかった一人の王子の分まで全ての子を愛したいと想う故なのかもしれない。

「ヘカベー、また無事に子を産んでくれて感謝するぞ！」

王妃と新たに生まれた姫君が待つ部屋に訪れて王は開口一番に王妃に感謝の言葉を告げた。

「まあ……」

既に妙齢となりながらも王妃ヘカベーは美しかった。

彼女は王妃としてではなく、母としてもトロイアを慈しむ女性である。

だが、その慈愛ゆえに後にトロイアを滅ぼすことを招き、そして我が子の死を招き、その愛ゆえに我が子の無念を晴らす。

父は情愛、母は慈愛に溢れ姫君は幸福なはずだった。

「さあ、顔を見せておくれ……」

プリアモスはこの世に生まれたばかりの娘を抱きかかえた。

すると、娘は心でこの男こそが自らの父であると理解したのか、父の顔を見て嬉しく思ったのか愛らしい声を出した。

その笑みは赤子の時点で既に将来約束された愛おしさが滲み出ている。きつと、この娘は姫君としてトロイアの全ての者から愛されるだろうと父は感じた。

「カッサンドラに劣らない愛おしさだ……」

将来、この娘の媚ことなる男に既に私は嫉妬を感じるぞ」

「まあ、気がお早いことですね……」

フフフ……カッサンドラも可愛らしい妹が生まれて嬉しいでしようね」

プリアモスのこの発言は一見、親馬鹿とも思えるが、これはこの姫君の一つ上の姉であるカッサンドラが可憐さを赤子の時から見せていたことによる経験則である。

姉妹であるカッサンドラは幼いながらも既に周囲から可愛がられるほどに可憐な姫君としての片鱗を見せている。

後の事ではあるが、この新たに生まれた姫君にとってカッサンドラこそが大きく関わっていくことになる。

侍女たちの誰もが国王夫妻の話を微笑ましく見え、きつとこの姫君には平穏な幸福が与えらえるだろうと信じていた。

「ははは、愛らしいな……ニネミア……」

父王と母妃の愛を感じてか、王女はさらに嬉しさを身体で表現した。

その愛らしい娘の様子にプリアモスはい、名付けようとしていた名前を口に出してしまった。

「……ニネミア 凧ネミアですか？」

「ああ、この娘の人生が平穏であって欲しいと思つてな……」

プリアモスは少し、黄昏ながらもそう言った。

プリアモスの親兄弟は姉を除いて大英雄に皆殺しにされた。

それは父にして先代の王であるラオメドンが招いたことではあるが、やはりそれでも平穩をプリアモスは望んでしまう。

「……そうですね。ほら、ニネミア？」

父様はあなたのこと大切に想っているわ」

ヘカベーはプリアモスの言葉から来る想いを察して、同じように娘の安寧を想った。

父に付けられた名前と母に付けられたばかりの名前を呼ばれて、今、「ニネミア」と言う名を授けられたばかりの姫君はさらに喜んだ。それを見て、国王夫妻はさらに彼女の名前を呼び、姫君は再び喜んだ。

幸せの繰り返し。

この場にいる誰もがこの時が続けばいいと考え、それが無理ならばこの場を織物の絵にしたいと思っただろう。

その時だった。

「陛下！ 予言を授かりに行った使者が帰られました！」

姫君が姫君としての幸せを奪われる時間を告げる音が近づいた。

「予言の使者」

「おお……そうか、通してくれ……」

プリアモスは期待と不安の相反しながらも友である感情を抱きながら予言を持ち帰った使者を呼ぶように言った。

かつてプリアモスは愛したのに愛せなかった王子がいた。

それは予言が理由であった。

その王子が王妃ヘカベアの胎にいる時にヘカベーが見た夢があまりに奇妙であったことから何かの兆候ではないかと考えた。しかし、それは凶兆であった。予言によるとその王子はトロイアを滅びに招くとされたのだ。

プリアモスは涙を呑んで我が子を捨てた。

それは父としての情を殺し、王としての責務であった。

そして、この新たな王女であるニネミアを授かった時にもヘカベーは再び夢を見た。

それは「巨大な一本角を持つ馬が群れを率いて風と共に野を駆け抜ける」と言ったものであった。

馬の勇壮さを物語る夢であったがそれでもプリアモスは王子のこともあり不安になり新たに授かった子のことを想って予言を授かりに使者を送り出した。

プリアモスは不安だった。

もし、この愛おしい娘がかつての王子と同じく将来トロイアに害を及ぼそうとする予言が下った時、果たして自分はもう一度我が子を殺せるのだろうか。

プリアモスは父である前に一国の王であり、王である前に一人の父親だ。

そして、そんな葛藤が頭に浮かぶ父の腕の中にもかかわらずニネミアは変わらず笑顔であった。

その笑顔が余計にプリアモスを苦しめる。

「陛下!!」

「……来たか……ご苦労であった。」

して、予言は……この子はトロイアに……害をなすのか？」
プリアモスはそれでも覚悟を決めて、愛おしい娘をヘカベーに預けて使者の答えを待った。

どのようなものであろうと預言は受け止めなくてはならない。
神々の怒りを買うことは王としては避けなくてはならない。

かつて、プリアモスの父は神を騙したことで罰を受け、そのことで大英雄に救われながらも今度は大英雄を騙したことで身を滅ぼした。
ゆえに誰よりも憤み深いのである。

王以外のヘカベーやその侍女、全ての者もまた固唾を呑んで見守ろうとした。

「い、いいえ……」

むしろ、新たに御生まれになられた御子はトロイアの名を高めるであらうとのことです……」

「それは真か!？」

それを耳にしてプリアモスは全ての不安が消え去ったかのように喜びを顔に浮かべ、ヘカベーは再び子を失わずに済んだことに安堵し、それにならって周囲の者たちも新たな姫君が受けた予言が祝福であると信じて疑わなかった。

「そうか……きつと、この子は類稀な英雄の妻か、神の御寵愛を受けるのだな……」

これは目出度きことだ!!」

プリアモスは父としては多少の寂しさを残す解釈をしながらも、愛娘の幸福を疑わなかった。

プリアモスはかつて大英雄の姿を目にしたことがある。

親兄弟を殺された身であるが、それでも目に映ったその姿は未だに記憶に残っていた。

プリアモスが憤み深いのは過去の戒めもあるが、同時に大英雄の威光を目にしたことによる己の器を理解していることもある。

娘に約束された幸福が与えられることにプリアモスは喜んだ。

「……陛下……御子は……姫君なのですか……？」

王の言葉を耳にしてこの場にいる中で唯一、喜びを浮かべずに重い

表情をしていた者がいた。

それは予言を持ち帰りし使者であった。

「……………ん？そうであるが？」

見よ！この愛らしさを！！

親の鼻肩目もあるが、きつとこの娘は美しい王女になるだろう——
——！！」

プリアモスは使者に愛娘の可憐さを自慢しようとした時だった。

「あああ！！なんてことだ……………！！」

運命とは……………こうも恐ろしいことなのか……………！！」

使者はまるでテーバイの悲劇の王の出生の秘密を知った大予言者の如く悲嘆した。

その突然の叫びにこの場にいる全員が静まり返った。

「どうしたのだ？」

これほど目出度き預言を授かり、愛らしい姫が生まれたのだ。

言うことなどあるまい」

プリアモスは使者の態度に少し怪訝さを感じながらも咎めようとしなかった。

愛娘の誕生に悲しみの声を上げられることは腹正しいことではあるが、あの大英雄に脅された形とは言え姉に救われるほどの人格者であり、怒りを他者にぶつけることはない。

トロイアが再建されたのは彼の人格があつてこそである。

プリアモスはそう言う王なのである。

ゆえに今回も広い心を以って聞き容れようとした。

「……………予言に続きがあります……………」

「何？」

使者の口からそれが出た瞬間、再び周囲に不安が広がった。

「……………もし御子が姫君ならば……………」

使者は口を噤みそうになった。

それは王を怒らせることが怖ろしかったのではない。授けられた予言があまりにも目の前の愛娘の誕生を喜ぶ国王夫妻と無辜にして無垢な姫君にとって残酷であつたからだ。

幸せを壊す。

ささやかなる親子として、姫君としての幸せを奪うことを使者は躊躇った。

しかし、それでも使者は口を動かさなくてはならなかった。

それこそが王女のことを救う唯一の方法であるからだ。

「もし王女として育てられれば……顔も知らぬ男どもに散々に辱められ異国の地にてその生涯を終えるとのことですから……」

使者は言ってしまった。

王女の幸せを奪ってしまった。

短いながらもそれでも平穏な戦場の匂いも知らないですんだと言うのに。

「な、なんだと!?!」

「そんなんっ!?!」

使者の口から出て来たあまりにも出て来た信じたくもない予言に王は絶句し、王妃は娘を抱きすくめて自らの子を見えない未来からの悪意から守ろうとした。

姫君の両親は我が子に降りかかるであろう不幸などと生ぬるい悲惨な将来に嘆いた。

この場にいる全ての者たちが祝いの声から一転して嘆きの声を上げた。

使者はそれを目にして自らが出してしまった言葉に深い悔恨の念を抱いた。

使者はこのまま黙ろうとした。

けれども、それでは余りにも姫君の父と母が哀れに思えてしまった。

それは使者が臣下だからではない。

一人の人間としての情であった。

「陛下……ですが、姫君の恐ろしい運命を変えられる方法が一つだけございます……」

使者はそれでも勇気を奮い立たした。

自らが明かすことが姫君の幸福を奪おうと言うことを理解しながら

らも。

「……それは本当か!？」

姫君の父親はその言葉に縋った。

それは王としてでなく、愛娘の父親としての姿であった。

愛娘に降りかかるであろう悲劇を避けられるのなら防ぎたい。

紛れもなく父としての情がプリアモスを動かした。

後に彼のその情愛は憎しみで心を曇らせた英雄の心を動かすことになる。

王だけでなく、王妃が、この場にいる者たちが使者の言葉に希望を抱いた。

「……仮に女子おなごであろうと戦士として育ち戦いに出れば、辱めとは無縁の生涯を送るとのことです……」

しかし、使者の語った言葉は余りにも理不尽なものであった。

「……なんだと……」

可憐さを既に見せ、誰もが姫君は愛されるであろうと思っていたのに、姫君に課せられたのは華よ蝶よと愛でられる生涯ではなく、勇ましさを求められる生涯であった。

プリアモスは呆然とし、ヘカベーはただただ娘を抱きしめ、周囲の者は何と声をかければいいのか分からなかった。

プリアモスは愛する妻の腕の中で悲嘆に暮れる周囲を気にもせず、無邪気に笑う娘を見て心が苦しくて仕方がなかった。

これより始まるは姫君の悲劇ではなく英雄譚。

勇壮なる一人の英雄の物語。

煌く星空を彩る一つの星。

悲劇の都市トロイアに咲きし一輪の花。

花は散る。

花が散るのを切なく思うは我らが常。

されど、花は何を思う。

最後まで咲き続ける花は何を思って散っていくのだろう。

第一エペイソデイオン

「フルトウーナ」

「はあっ！」

「おっと、それじゃダメだぞ？」

フルトウーナ？」

トロイアの王族の青年が同じく王族である年少の王子が繰り出した槍の刺突を難なく弾いた。

「てやあ！」

「おっと、危ない」

弾かれてもめげずにフルトウーナと呼ばれた王子は再び突きを繰り出すもそれを兄は一瞬、焦りを見せるもすぐに余裕を取り戻した。

兄はトロイアで最も優れた戦士であり周囲からも期待されている。そんな兄からすればフルトウーナの槍の動きは予測できるものであったらしい。

「ほいっとー！」

「あ……」

稽古は兄がフルトウーナの槍を弾き飛ばしたことで終わりを告げた。

年齢差もあるが、既に兄の武人としての片鱗はトロイアの中でも煌いていた。フルトウーナも槍の名手であったが兄には及ばなかった。

後にこの兄はトロイアの英雄と呼ばれることになるのである意味、仕様がなないことである。

「ありがとうございます！」

ヘクトール兄上！」

完全にいなされながらもフルトウーナは長兄であるヘクトールに日課である稽古に付き合ったことに感謝の言葉を述べた。

フルトウーナにとっては一番上の兄にして、トロイア随一の武芸者としても既に名高いヘクトールは敬愛に値する人間である。

故に毎日、父プリアモスの頼みもあるとは言え快く武芸の指導を受

け入れるヘクトールのことをフルトウーナは慕っていた。

「フルトウーナは律儀だなあ……」

ま、今回も中々いい突きだったぜ？」

ヘクトールは子犬のようにも思える愛らしさを感じさせる笑顔のフルトウーナの頭を撫でながらそう言った。

「い、いえ……私など……ヘクトール兄上と比べるとまだまだです……」

雲の上の存在であり最も敬愛する武芸者である兄の称賛にフルトウーナは身体をもじもじとしながら恥ずかしそうにした。

既にトロイアでも、一、二を競う武芸者であるヘクトールに褒められることは父プリアモスに戦士として育てられているフルトウーナにとつては最大の賛辞である。

しかし、やはりまだ十二を過ぎただけもあり、子供心が残ることもあり羞恥を感じてしまった。

「いやいや、フルトウーナが頑張ってくれるとお兄ちゃん、マジで大助かりだわ……」

頼もしい妹がいると安心だ」

「あ、兄上……」

ヘクトールは妹に対してそう言った。

フルトウーナは女でありながらも王子でもある。

彼女が女であることを知るのはトロイアの王族の中でも限られた者だけであるが、この兄にして次のトロイアの王となる長兄はそれを知る限られた一人である。

齢十二歳にして、幼いころから既にトロイア随一の武芸者であるヘクトールにフルトウーナが鍛えられているのは、フルトウーナが女であることを周囲に知られないためと、女でありながらも戦場に出ることを予言によって定められたフルトウーナが戦場で膂力に劣る男たちに不覚を取られないためであった。

ヘクトールを尊敬するフルトウーナにとっては、予言の内容は聞かされていないが既に王女としての未練を断ち切ったこともあり、兄の妹扱いには少し反応が困ることであった。

「少なくとも、槍はまだまだ兄ちゃんの方が上だが、馬に関しては既に兄ちゃんよりは上だぞ？」

兄はフルトウーナの馬術の才能を褒める。

それは決して、誇張でもなく事実であった。

フルトウーナは既に馬に至っては戦車を使うのではなく鞍のみで乗馬し馬上から走りながら的に当てる程に馬を乗りこなしている。

フルトウーナは馬に好かれている。

フルトウーナが厩うまやに来るだけで馬たちいなくなってしまうほどである。

さらには裸馬すらも乗りこなすときもあるほどだ。

「だけどな？あんまり無理すんなよ？」

この前も森で熊に会ってそれを倒したのはいいが……

皆、心配してたんだぞ？」

「……はい、ごめんなさい……」

フルトウーナは前日、同年代の友人たちを逃がすために弓矢で応戦し熊を倒した。

それを聞いて、父のプリアモスや母のヘカベー、ヘクトールを始めとした年長の兄妹たちは心配してしまい、普段飄々としているヘクトールでさえ叱るほどであった。

ヘクトールはそんな勇ましいながらも危うさを見せる妹の姿に複雑さを覚える。

既にヘクトールは政治家としても、軍略家としても、戦士としてもあらゆる才能を見せている。

恐らく、トロイアに事があつたらならば、誰もが彼を頼りにするだろう。

だが、それ故にヘクトールは危惧している。

もし自分の身に何かあればトロイアは揺らぐだろうと。

父プリアモスは治世においては優れているが、戦時においては向いていない。

故にトロイアを指揮するのは己だと考えてのことだった。

それを考えて、ヘクトールは二つの保険を求めていた。

一つはトロイアの総指揮官となり得る後継者の育成だった。

万が一、己が討ち取られた時にトロイア全体を指揮する人物であった。

精神的支柱ならば特段武勇に秀でなくてもいい。

全体を見回せる視野さえあればいいとヘクトールは考えていた。

そして、もう一つは己と肩を並べられるか、それ以上の武勇に秀でる将を見つけることであった。

長兄は総指揮官である己が前線に出過ぎるのは危険だと考えていた。

それは決して、臆病から来るのではない。

トロイアの国民は誰もが己を頼りにしている。

今現在でさえ、父プリアモスは己に助言を求めて来る時が多い。

そんな己が死ねば国全体の士気が落ちると考えたのだ。

特に己を誇りに思う父プリアモスと我が子に時として夫以上に愛情を見せる母ヘカベは嘆くだろう。

だからこそ、ヘクトールは己と攻めを分担できる勇将を求めたのだ。

また、ヘクトールは仮に自らが先に死んだとしても後継者と勇将の双方が健在ならばトロイアは安泰だと考えてもいた。

後継者は全体を、勇将が前線を指揮する。

それだけで己の代わりを作らないでも済むと考えたのだ。

フルトウーナは後者であった。

既にフルトウーナの武芸の腕はトロイアでは、長兄である己や従弟であるアイネーアスに劣らないほどだ。

さらにはフルトウーナは幼いころから時折垣間見せる勇気と友人たちから慕われる将器が存在した。

彼女のマネをしようとして、誰もが裸馬に乗るほどだ。

その影響でトロイアの軍馬の保有量は他国と比べても多くもないのに軍馬の戦力は明らかに上だ。

ヘクトールは彼女こそがトロイアの矛たる存在だと確信していた。

だがなあ……

妹がそんなことしなくちやならんとは……

ヘクトールは心の中で嘆いた。

ヘクトールはフルトゥーナが戦士としての素質があり過ぎることが悲しかった。

かつて、父プリアモスから気化された予言を耳にして、ヘクトールはフルトゥーナの王女としての予言を決して現実のものにはしないように戦士として一級品に育てようとした。

仮令、予言通りに戦士としても育てても戦場で女がいれば、敵兵は容赦なく彼女を嬲るだろうと考え、何よりも下手に戦場に出て命を落とさないようにと心を殺して可愛い妹を鍛えてあげた。

そもそも、彼女を騎兵としての才能を認めているのも戦車よりも圧倒的に機動力のある騎兵の方がすぐに逃げられると考えてのことだった。

ヘクトールにとっては国全体が家族そのものであるが、その中でも本当の血のつながりがある王族たち、そして愛する者もまた命を賭しても守るべき存在である。

だからこそ、自らの祖父の代に大英雄によって完膚なきまでに敗れたトロイアの過去を知ってどんな手段を使ってもトロイアを守るつもりであった。

トロイアはアカイア諸国にとっては交易の要所であった。

何よりもトロイアは一度、大英雄によって敗れている。

そのこともあってか、再びアカイアの国が攻めて来ることも考えられた。

故に必ず、いずこかの欲に駆られた王が攻めて入る可能性を考えてヘクトールは軍略家としての才を伸ばした。

いずれにせよヘクトールにとってはトロイアは家族なのである。

同時に数多くいる妹たちや幼い弟たち、そして、既に婚約を交わしているアンドロマケは彼にとっては命に代えても守ろうとする存在なのである。

だが、運命のイタズラとも言えるのか。

自分にとって守りたいと思う存在の一人が己が求めるトロイアの矛であり、己が死地に向かわせなくてはならない勇者なのである。

あゝあ……

こりや、兄ちゃんが頑張つてニネミアを死なせないようにしないとな……

ヘクトールは大切な妹の未来を考えて改めて誓った。

妹は弟たちと比べると戦士としても、将としても明らかに強い。

しかし、同時に妹は余りにも強すぎるのだ。

前日の熊の件にしても、同年代の友人たちが熊に襲われたことで彼女は友人たちを逃がすために弓で注意を引いたのだ。

友人たちが逃げ切るまで彼女は何度か弓で射かけるが、熊はしぶとく、いや、激昂してフルトウーナのことを追いかけた。

フルトウーナは熊を倒すも、既に矢は尽きており、下手をしていれば命を落としていたのはフルトウーナの方であつた可能性があるのだ。

フルトウーナは他人のために自分を犠牲にしがちだ。

それは戦場においても危険なことに他ならない。

故にヘクトールは全体の指揮官としてフルトウーナを心配し、仮に戦争があれば、フルトウーナに頼り過ぎるのは危険だと考えたのだ。

それは将としての判断もあるが、兄としての情もあつた。

「よし、今日はここまで。」

カツサンドラも待つてんぞ?」

ヘクトールはそう言つてフルトウーナを急かした。

「はいーありがとうございますー兄上ー!」

それを聞いて、フルトウーナは喜びを明らかにして無邪気に姉の下へと真っ先に向かった。

「……頼むぜ、カツサンドラ……」

ニネミアを思い止ませられるのはお前だけなんだから……」

ヘクトールは妹に妹のことを託した。

フルトウーナは一つ上の姉であるカツサンドラを慕っている。

ヘクトールはカツサンドラとの繋がりこそがフルトウーナが無茶をすることを抑えられる唯一の手段だと考えていた。

フルトウーナにとってはカツサンドラの涙こそが最も見たくない

ものであるからだ。

しかし、運命とは残酷な事か。

それこそが花を咲かせる水であり、太陽であり、土であるとは。

「カッサンドラ」

「姉上」

「あら、ニネミア。」

「いらつしやい」

稽古が終わり、湯浴みを終えたフルトウーナは数多くいる兄弟姉妹の中で最も慕う歳が近い姉である姉姫カッサンドラの許へと訪れた。王女カッサンドラはトロイア王プリアモスの数多くいる娘の中で最も可憐な王女の一人とされている。

その心根も嫺やかであり、まさに一輪の花のような美女である。

フルトウーナは稽古が終わると必ずこの姉の許へと向かう。

それは姉にとあることを求めるからである。

「ニネミア。ほら、座りなさい」

カッサンドラは妹に椅子に座る様に催促した。

「はい」

姉の言葉を受けてフルトウーナは目を年相応に輝かせて姉に言われるままに座る。

カッサンドラは素直に自分の言うことを聞いた妹を微笑ましく思い静かに背後に立った。

「本当に綺麗な髪ね」

そのままカッサンドラはフルトウーナの栗色の長い髪を梳き始めた。

既にフルトウーナの髪は侍女たちが布で水を拭き取られ、香油で整えられている。

しかし、フルトウーナの髪の手入れの最後はカッサンドラに櫛を入れてもらい最後にうなじの近くで一つに括ることになっている。

それは唯一、フルトウーナがニネミアとしていられる時間でもある。

「姉上にそう言われると私も嬉しいです」

フルトウーナは心の底からの言葉を述べる。

カッサンドラは数多くいるトロイアの王女の中でも、五本の指に入

る美女である。

またカツサンドラとフルトウーナはよく似ている。

カツサンドラには双子の弟ヘレノスもいるが、カツサンドラとフルトウーナが並ぶと瞬時にこの二人が姉弟だと理解できる程である。

これは仮にフルトウーナがニネミアとして生きていれば姉妹だと誰でも気づくだろう。

フルトウーナも自らの境遇故に女としての側面を褒められることには抵抗感が生まれることはあるが、それでも最愛の姉との共通点ならばと甘んじて受け入れている。

この姉妹は互いに互いを気に掛けているのだ。

「ずっとこのままだといいわね……」

「はい」

カツサンドラは妹の髪を梳かしながら囁く。

フルトウーナは姉の言葉に肯く。

カツサンドラにとってフルトウーナは己の半身とも言える双子の弟ヘレノスよりも弟妹らしい妹なのである。

双子の弟ヘレノスはカツサンドラにとってはもう一人の己と言える存在でありそこにも確かに絆がある。

ただフルトウーナに関しては物心が芽生えた時に初めて知覚した生まれたばかりの弟妹としての印象が強く、カツサンドラにとってはフルトウーナと言う妹は初めて出来た愛しむ存在なのである。

初めて父と母に抱えられて目にした一つ下の妹をカツサンドラはこんなにも小さくて壊れそうでありながらも、いや、そうだからこそ尊いものがあるのかと言う初めての感覚を幼いながらに感じた。

カツサンドラはそんな妹が戦場に出ることを非常に恐れている。

何よりもカツサンドラはフルトウーナの境遇を知ってしまった数少ない人間の一人であり、その境遇を誰よりも悲しんでいる。

なぜ妹が男のように戦士として育てられ、いつどこで死するかもしれない運命の中にいるのかをカツサンドラは嘆いている。

「でも、ニネミア……」

もうあんな危ないことをしてはダメよ？

本気で心配したんだから」

カツサンドラはフルトウーナが友人たちを守るために熊に立ち向かったことへの心配を口に出した。

カツサンドラはフルトウーナを失うことを恐れている。

だからこそ、フルトウーナのことを愛し続けている。

そうすることで必ずフルトウーナが自分を泣かせまいと思って自らの命を大事にすると信じて。

「うっ……はい……」

姉の愛情が妹の心を縛る。

それは姉としての二心ない愛である。

いつまでも妹には生きていて欲しい。危ないことをしないで欲しい。無事でいて欲しい。

ただそれだけの想いである。

それは親鳥が何時までも雛を巣立たぬようにする愛でもある。

それでも姉は妹の生を望む。

しかし、皮肉にもこの姉の愛情が妹を戦火へと導くことになっていく。

「運命の岐路」

「ふく……やっぱり、ヘクトール兄上は強いなあ」

兄との訓練の後に汗を流すためにフルトウーナは湯浴みを終えてカッサンドラの部屋へと向かう。

十四歳になったフルトウーナはトロイアの中でも将来を待望される有数の若き武芸者として成長した。

既に兄ヘクトールは政治家として、將軍としての立場を背負っており、昔ほどフルトウーナ個人を鍛えることはできない。

しかし、それでもヘクトールはフルトウーナを訓練と称して兵たちの前で自ら鍛えており兵たちの武威高揚とフルトウーナ自身の訓練も兼ねていた。

「全く勝てない……」

槍での戦いではフルトウーナは必ずと言っててもヘクトールに負ける。

ただフルトウーナの槍の腕はヘクトールでさえもまともに戦えば不覚を取りかねないほどに鋭く速い的事实であり、ヘクトールは搦め手を交えてフルトウーナを翻弄するために勝てないのである。

「……やっぱり、私が女だからかな……」

フルトウーナを是自らの身体が年相応の女としての成長を見せていることに悩みを抱いていた。

既にフルトウーナは多少筋肉が付いているとは言え、女性としての身体つきになっており胸の膨らみも鎧さえつけければ隠し通せるほどではあるが存在しており、髪を結わずにいればカッサンドラの妹と言われたら誰もが首を縦に振る美貌の持ち主になっていた。

最近、そんなフルトウーナに対して、フルトウーナを美男子と思っているトロイアの女たちや男色の気がある男に言い寄られてすらいる。

さらにフルトウーナは確かに戦士として男と自分の膂力の違いに真剣に悩みを抱えている。

フルトウーナは確かに馬術や弓術、剣術、槍術は優れている。

しかし、それでも男と女の地方の違いを理解しているし、単純な力比べでは負けることも自覚していた。

「……本当になんで私を戦士……いや、王子として育ててるんだらう……」

フルトウーナは自らが女の身にも関わらず、おうじとして、戦士として育てられてきたことに対して幼き時から本気で悩み続けて来た。かつて父プリアモスにその答えを求めると、父はただ謝罪するのみに教えてくれなかった。

母にも、兄人も、世話係にも、教育係にも己が女であることを知る全ての者に訊ねても誰も教えてくれなかった。

最愛の姉に訊いても彼女もまた『知らない』と答えるのみであった。ただここで言わせてもらおうと、カツサンドラのみは本当に真相を知らないのである。

それに仮令、知っていたとしてもどうして幼い何も知らない無垢なる妹に『お前は将来、辱められるか戦士として戦うしかない』と言う残酷な運命を告げられる。

それはプリアモスやヘカベ、ヘクトール、フルトウーナを取り巻く全ての人間も同じである。

誰もがフルトウーナを愛するが故に言えないのである。

しかし、それでもフルトウーナは己のその境遇を呪った時もある。美しくも優しい姉と同じ性別でありながらもどうして己は男として育てられなければならないのかと幼いころは武芸の稽古の辛さの中で悩み続けた。

花よ蝶よと愛される可憐な姉や妹たちと同じように綺麗な衣服を纏いたいし機織りをしたいし恋の話もしたい。

義姉のアンドロマケーや実姉クレウーサの様に兄ヘクトールや従兄アイネーアスのような男と出会って善き夫婦になりたいとフルトウーナは未だに思っている。

だからこそ、フルトウーナはよく馬に乗って悩みを晴らすかのよう
に風と一体になる。

自らの名前の如く。

特に物心ついた頃からは稽古が終わる度に人知れずに泣いていた。周りの女たちが楽しそうに見ているのを恨めしそうに思いながら同じ女なのにどうして自分だけがこんなことをしなくてはならないのかと。

そんなフルトウーナの涙を唯一目にしたのはカツサンドラであった。

フルトウーナはいつも隠れながら泣いていたがその光景をカツサンドラは偶然にも目にして弟を放っておけずしつこくも彼女に泣いている理由を訊ねたことで弟が実は妹であることを知ったのであった。

当然ながらカツサンドラは悲憤した。

最も自分が可愛がっていた弟がなぜ女でありながら戦士として育てられたのかをカツサンドラは王である父に不敬を覚悟で詰め寄った。

しかし、父は何も答えなかった。

カツサンドラはその時憤慨しながらもあることを条件に引き下がった。

それはフルトウーナの女としての名を求め、自分だけがせめてその名で呼ぶことを許すことであった。

父プリアモスはそれを許しカツサンドラはその時からフルトウーナのことを二人だけの時はフルトウーナをニネミアとして扱い慈しんだ。

そして、フルトウーナは最初は戸惑うも姉の愛情を感じていくことで次第に心を許し姉に妹として甘えることで救われてきたのだ。

フルトウーナが歪まずにいたのは偏にカツサンドラの愛情であった。

フルトウーナは辛い時に必ずカツサンドラの許で泣く。

カツサンドラはそんなフルトウーナを慰める。

だからこそ、フルトウーナにとってカツサンドラは最愛の姉なのである。

「姉上に……甘えるのもそろそろかな……」

フルトウーナは切なさや寂しさと共に自分に言い聞かせようとした。

カツサンドラはトロイアの守護神と言われる太陽神アポロンの目に留まり求愛されている。

カツサンドラも当初は初めての異性からの強い押しと愛の言葉に戸惑ったが日に日にアポロンの熱意と初めての異性からの求愛に胸が躍り、最近ではフルトウーナに少し恥ずかしながらも嬉しそうに恋する乙女として語っている。

アポロンとの恋を話す姉の姿を見ているとフルトウーナは姉を取られた気分になり多少のやきもちを焼く。

「……まあ、姉上が幸せならいいかな？」

ただフルトウーナは寂しくもあるが、それでも姉のアポロンへの恋を語る際の幸福な顔を見ていると心のどこかでフルトウーナは自身も嬉しくもあった。

「それにアポロン様が相手ならば姉上を悪い様にしないと思うし……」

フルトウーナは同時にアポロンのことも悪く思っていないかった。

確かにアポロンは恋多き神でありそのほとんど悲恋で語られていることも事実ではあるが、基本的にアポロン自身が恋人をぞんざいに扱うことはない。

大体の場合は相手がアポロンを嫌ったり、アポロンを裏切ったり、他人に嫉妬されたりして悲劇的な目に遭うことが多いのだ。

仮にアポロン自身に原因があるとしてもそれは善意によるものであり、寿命を与えながらも不老を与え忘れたりとする等といった過失が原因であって、アポロンは恋人が自らを裏切らない限りは恋人を破滅させるような真似はしないのだ。

「姉上がアポロン様を裏切るようなことはしないとと思うし……」

加えて、フルトウーナは姉の貞淑さを信じていた。

アポロンはあくまでも相手が裏切ったり、恋を拒んだりしない限りは相手を害することはない。

その点、カツサンドラならば安心だとフルトウーナは考えていた。

カッサンドラはアポロンと情を交わしておきながら他の男と情を通ずることはないだろうし、何よりもカッサンドラは最初は戸惑いを隠せずにいなかったが今は心の底からアポロンを慕っている。

その彼女がアポロンを拒むことはないだろうとフルトゥーナは疑いもしなかった。

それは彼女がフルトゥーナに恋を語る際の嬉しそうな顔が物語っていた。

「着いたか……」

フルトゥーナはいつものように姉の部屋の扉の前に立った。

きつと扉の先にはいつものように自らの好きな姉のえがおがあるとフルトゥーナは疑わなかった。

「姉上、私です」

フルトゥーナはいつものように姉に呼びかけた。

フルトゥーナは姉の返事がいつものように返って来るのを待った。

「……姉上？」

しかし、返事は返って来ず静寂が漂うのみであった。

「……姉上、失礼します」

訝しくも思いながらもフルトゥーナは失礼を承知で部屋に入ろうとした。

カッサンドラは必ず声をかけたらどんなことだあっても返事をする人間である。

特にそれはフルトゥーナ相手ならば尚更である。

いつもと様子の違う姉に違和感、同時に嫌な予感を覚えてフルトゥーナは扉を開けた。

それが自らの運命の扉そのものであると理解せずに。